

バラッド文化の拡散拡大の要因としてのブロードサイド¹

中島久代

九州女子大学共通教育機構 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2019年5月28日受付、2019年5月28日受理)

要旨

バラッド研究会によるこれまでの伝承バラッドおよびバラッド詩の共同研究によって、バラッドとは「バラッド」ということばを軸に拡散拡大してゆく文化継承現象であるという新たな認識が形成された。このような、バラッド文化の拡散拡大の諸相を生む要因としてブロードサイド・バラッドのメディア性が着目されるが、本稿ではこの議論を行うための前提として、ブロードサイド・バラッドとは何かを、主としてFriedmanとShepardの先行研究によって把握し、その上で、19世紀までのブロードサイド・バラッドの、その後の拡散拡大へとつながる3つの特色「その時代時代の生きた音の記録」、「うたい手と聞き手の分離を示すフレーム」、「文字テキストの飾り」を指摘した。また、本論の付録として、筆者の手元にある「最後のブロードシート」から、現代まで受け継がれたブロードサイド・バラッドのスピリットを紹介した。

0. 本考察の背景

伝承バラッド (traditional ballads) またはバラッドと呼ぶ文化事象は、中世以来ヨーロッパ各地で、職業詩人によってではなく、民衆によってうたい継がれてきた物語歌を指し、本稿では英語圏におけるバラッドをいう。物語であり、詩であり、曲が付いてうたわれる場合が多く、作品によっては舞踏も付随することがある。したがって、バラッドとは民衆による総合芸術の一表現形式と理解される。²バラッドは起源が中世にあることから、大方は過去の文化であり、現在まで生命を繋いだ希少な作品もあるが、極めてマイナーな文化領域と理解されがちであった。しかし、バラッドというジャンルに括られる作品群の数、それらの歴史と多様性を概観すると、バラッドの伝統とは英語圏の詩・歌の伝統に匹敵するものとして、これまでの認識は改められる方向にある。筆者が参加するバラッド研究会は、個々人の研究の他に共同作業として、伝承バラッドの翻訳と紹介、伝承バラッドの教科書の刊行、バラッド詩 (literary ballads) 編纂集の刊行、17世紀以降現代までのバラッド詩の全データ収集とそれらの翻訳という、主としてバラッドのテキストを対象とした共同研究を継続してきたが、それらの作業を介して、バラッドという文化が以下のように発展してゆく現象であることが明らかになった。

- (1) 口承伝承歌であったバラッドが活字文化に取り込まれて以降、バラッド編纂集が相次いで刊行されたことやブロードサイド・バラッド (broadside ballads) が発生したことなどにより、バラッドは印刷媒体としての強いメディア性を獲得してきたこと
- (2) 職業詩人によるバラッド詩の創作においては、バラッドの様式・モチーフ・エートスなどの純粋な継承や模倣がなされると同時に、パロディ・バラッドが多数生み出されてきたこと
- (3) 伝承バラッドが民衆文化とは異なるオペラ、演劇、クラシックなどのパフォーマンスのジャンルと結びついてきたこと
- (4) 伝承バラッドの物語内容とは直接の繋がりのない版画・挿絵とも強い結びつきを生んできたこと
- (5) バラッド風 (的) だけれども、バラッドというタイトルを付しているもののバラッドとは言い難い、バラッドということばをボーダーレスに使う作品が夥しい数にのぼること
- (6) ネット上で個人が情報発信する時代になって、数百年前の伝承バラッドのテキストが現代の世界各地の人々に読まれ、うたわれ、物語が演じられ、楽しまれているという事実が周知され、バラッドは新しいメディア性を獲得していること

このような現象を研究の過程で確認したことによって、バラッド研究会では、バラッドとは「バラッド」

ということばを軸に拡散拡大してゆく文化継承現象であるという共通認識を持つに至った。

したがって、バラッド研究に求められることのひとつは、バラッド文化の拡散拡大の諸相を包括的に捉えること、そのことを通して、バラッド文化の核にあるものは何かを改めて考察することであろう。これまで筆者のバラッド研究の視点は、伝承バラッドからバラッド詩への展開という直線的な太い繋がりに置かれていた。職業詩人たちが伝承バラッドやその編纂集からどのように直接間接にバラッドのモチーフやエトスの影響を受けたかの解明が、バラッド文化の伝統の太い幹を見ることになる、という認識である。ブロードサイド・バラッドは数は圧倒的に多いものの、その太い幹に傍から生えた枝のようなジャンルと認識していたが、バラッド文化の拡散拡大の諸相を見ると、ブロードサイド・バラッドが持っているメディア性、情報伝達性も、バラッド文化の伝統の太い幹を支える一要因ではないか、と思えるのである。このような、バラッド文化の拡散拡大の諸相を包括的に捉える試みのひとつとして、バラッド研究会では、ブロードサイド・バラッドのメディア性に着目し、題材を大括りでの19世紀以降現代までのブロードサイド・バラッドに取って、バラッドはどのような拡散拡大して継承されてきたかを議論する機会を、2018年10月の日本英文学会第71回九州支部大会において得ることができた。³

以下の論考は、その議論に先立つ前提条件およびシンポジウム参加者へのフックとして、ブロードサイド・バラッドとは何かをまとめ、その上で、19世紀までのブロードサイド・バラッドの、その後の拡散拡大へとつながる特色を指摘したものである。第2節「ブロードサイドが意味するもの」および第3節「ブロードサイド・バラッドの隆盛」に関しては、Shepard, *The Broadside Ballad*中の1. “The Broadside” (23-30)、3. “The Broadside Ballads” (47-65)、およびFriedman, *Ballad Revival*中の2. “The Broadside Ballad” (35-63)を出典として、まとめたものである。

1. ブロードサイド・バラッドのうたい手・売り手

概要としてブロードサイド・バラッドを説明すれば、15世紀に印刷文化が生まれて以降、ブロードシート (broadsheet) という片面刷りの大判紙に印刷されて流布したバラッドを指す。ブロードサイド・バラッドは新聞に先駆けてジャーナリスティックな役割を担っていたため、民衆にとっての政治や時事問題を知る貴重な情報源であった。いわば原初的なメディアであるが、近現代の、ビラやチラシに掲載され流布される文芸や、世相を批判するパロディや替え歌へと展開する、長い生命力をもったメディアと捉えることができる。



‘Autolycus’ (1897) Edwin Austin Abbey (1852–1911)
(<https://artgallery.yale.edu/collections/objects/41502>)

ブロードサイド・バラッドのうたい手・売り手たちは、バラッドの創作のみならず、ブロードシートに印刷し、自らうたい、路上でそれらを販売した。‘peddler’または‘hawker’と呼ばれたり、‘rogue’と罵られる階層でもあったが、彼らは古くから文学作品の中に登場して親しまれている。Shakespeareの*The Winter's Tale* (1610)に登場するAutolycusもその一人である。

彼の劇中での役どころは浮浪者であり、スリで糊口をしのいでいる。第4幕第4場、羊飼いの小屋に登場人物たちが集ったところで、オートリカスは印刷されたバラッドをうたって売りさばこうとする。

[Act IV, Scene iv]

Clown: What hast here? ballads?

Mopsa: Pray me, buy some: I love a ballad in print, a

life, for then we are sure they are true.

Autolycus: Here's one, to a very doleful tune, how a usurer's
wife was brought to bed of twenty money-bags at a
burden, and how she longed to eat adders' heads
and toads carbonadoed.

Mopsa: Is it true, think you?

Autolycus: Very true, and but a month old. (260-68)

.....

Autolycus: I can bear my part; you must know 'tis my occupa-
tion. Have at it with you. (296-97)

道化 なんだい、こりゃあ？歌か？

モブサ ねえ、どれか買って。あたし、印刷された歌って大好き。

だって、活字になるぐらいだから、きっとほんとうにあった話なもの。

オートリカス これんなかどうです、とっても悲しいメロディーで、高利貸しの女房のことを歌ったも
のです。その女房が一度のお産で金袋を二十も産んだとか、マムシの頭やガマガエルの
シチューを食べたがったとかいう話でして。

モブサ それ実話？

オートリカス 実話ですとも、それもつい一月前のことです。

(中略)

オートリカス じゃあ男のところは引き受けましょう、それがあたしの商売ですからね。(小田島雄志訳)

残念ながら、スリのオートリカスに商売気はないらしく、自ら創作したバラッドに曲を付けて舞台上の人物
皆にうたわせるが、あっさりと退場する。伝承バラッドの発生と流布には吟遊詩人たちが密接に関わって
いるが、各地の情報を物語にして伝え、一種の畏怖をもって遇せられた吟遊詩人たちの衰退の時期は、印刷
文化の浸透によるブロードサイド・バラッドの隆盛と必然的に同じ時期となる。オートリカスに見る17世紀
のブロードサイド・バラッド売りは、もはやいかかわしい商売人として描かれている。⁴

2. ブロードサイドが意味するもの

ブロードサイドはブロードシートとも呼ばれるが、その実体は、当日のニュースを伝えればそれで役割を
終えて捨てられた、廉価な大判紙を指している。ブロードサイドは声明、宣伝、政治や時勢の諷刺など、短
めの文や詩が片面に印刷されたものであり、ブロードシートは回覧文書、政治演説など、1ページを超える
長めの散文や詩が両面に印刷されたもの、と区分される場合もある。あるいは、1556年設立の書籍出版業
組合 (Stationers' Company) が、貧しい印刷業者には、大方、片面刷りブロードサイドでライセンスを発
行し、そのためブロードシートと区別が生じたとも言われる。ブロードサイドまたはブロードシートとは、
バラッドと限定せず、散文韻文入り混じった印刷物、情報伝達の初期のメディアと理解するのが妥当であろう。

これらの媒体のその後の変遷にも触れておくと、ブロードシートは折り畳まれるとチャップブック
(chapbook) となり、現在のペーパーバックの先駆けとして、16世紀から19世紀にかけて民衆による安上
がりな文芸誌として広く普及した。また、パンフレットの形でのバラッド、ソング集は'garland' と呼ばれ、
16世紀には、著名な詩人も宮廷詩人も居酒屋にたむろする三文文士もガーランドにバラッドを書くよう
になり、それによって厳密な意味でのバラッドと詩の区別は溶解していった。バラッドというタイトルを冠し
ながら、バラッドの様式・モチーフの特色を持たない夥しい数の作品が生まれたのは、このような印刷文化
の発展に伴う現象と理解することができる。

3. ブロードサイド・バラッドの隆盛

ブロードサイド・バラッドの担い手のイメージを掴み、ブロードサイドという用語の意味を確認したうえで、ブロードサイド・バラッドの発展をShepardとFriedmanに従って俯瞰する。

ブロードシートに掲載された時事・事件をバラッド形式、または厳密な意味でのバラッド形式ではなく、詩の形式でうたったものはブロードサイド・バラッドと呼ばれるが、ブロードサイド・バラッドのトピックや内容は、実際には、時局のニュースや話題を題材として新たに創作されたものに限定されるのではなく、古い伝承バラッドに手を加えた歌が印刷流布される場合もあり、両方のタイプのバラッドがブロードサイド・バラッドと呼ばれた。逆に、伝承バラッドとして後世に編纂集に再録されたバラッドには、純粋な口承伝承ではなく、ロビンフッド・バラッド群のように、ブロードサイド・バラッドが口承化したものもあり、口承伝承とブロードサイドは区別を不要として、バラッド文化を形成していったと言えよう。伝承歌がブロードサイドとして流布した背景について、シェパードは、16世紀以降には産業革命とそれに伴う地方の都市化現象が進展し、町となった地域の住民たちは、めまぐるしく移り変わる時局のニュースを求めつつ、他方で、無くしていきつつある口承伝承の物語や歌という、民衆の遺産を記録するというニーズがあったため、と分析している(48)。時代時代に民衆の求めるものが、メディアとしてのブロードサイド・バラッドの形を取ったのである。

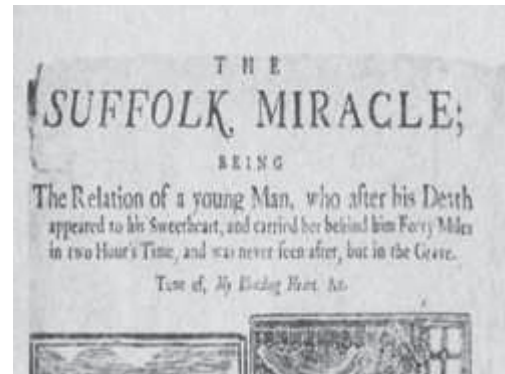
ブロードサイド・バラッドは印刷技術の飛躍的な発展と歩みを同じくしており、その伝播力は伝承バラッドが世代から世代へ、または吟遊詩人によって村から村へ広められたスローテンポの伝播と比べれば、速度も範囲も圧倒的に勝ることは自明の理である。その飛躍的な発展を数値として把握すると、1520年代、地方の出版社の売り上げの大部分はブロードサイド・バラッドによるもので、エリザベス朝には40の出版社がロンドンの書籍出版業組合に加盟し、1556年からすべてのバラッドを登録制としたが、設立からわずか44年の1600年までに、およそ2000作以上のバラッドが登録されたという。1660年代までには毎年400,000作品が売られ、その頃がブロードサイドのピークの時期とされている。文化の急激な変化は社会の軋轢を生む。このようなブロードサイド・バラッドの隆盛の背後に、ブロードサイド・バラッド弾圧の歴史もあった。1533年には「英語による人気本、バラッド、詩歌、他の猥褻な物語」(Ward and Waller, 96)を弾圧する声明書がイギリスで出された。こげおどしや警告ではなかったようで、1537年にはJohn Hoganなる人物が政治的なバラッドを歌ったという罪で逮捕されるという事件が起きたという。バラッド、バラッドシンガー、印刷所に対する弾圧にもかかわらず、民衆の嗜好をメディアに乗せたブロードサイド・バラッドは発展拡大の道をたどった。フリードマンは、18世紀の終わりまでには、バラッドという名称自体が、ロンドンでも地方都市でも、通りや市場で売られるブロードサイド・バラッドを指すようになったと断言する(35)。

4. バラッド文化の拡散拡大から見るブロードサイド・バラッドの特色

19世紀までのブロードサイド・バラッドについて、次の3項目をバラッドの拡散拡大へと繋がった特色として指摘してみたい。

(1) 「その時代時代の生きた音の記録」

そのひとつは、ブロードサイド・バラッドは「その時代時代の生きた音の記録」であるという点である。ブロードサイド・バラッドのテキストを眺めると、「～の旋律に合わせて」という一文がタイトルの下に印刷されており、読むというよりうたわれるという性質が顕著に示されている。一例として、“The Suffolk Miracle”「サフォークの不思議なできごと」(Child 272)⁵を見てみよう。次ページの図版は、New Castle upon Tyneに住むJohn Whiteという人物による、1711年ごろのブロードサイド・バラッドである。



(<https://mainlynorfolk.info/watersons/songs/thehollandhandkerchief.html>)

愛し合う恋人たちが、娘の父親によって引き離され、若者は恋の病で命を落とす。一月後に亡霊となった若者は娘のもとを訪れ、娘の父親の馬に彼女を乗せて父親の館へと疾走する。途中、若者は頭痛を訴え、娘は頭にハンカチを巻いて痛みを和らげる。館に着き、若者は消え失せ、若者に連れてきてもらったと主張する娘に周囲は黙る。若者の墓を暴くと頭蓋骨にハンカチが巻かれていた。娘は悲しみのあまり息絶えた、という物語。この物語はもともと17世紀後半に出版されたブロードサイド・バラッドであったが、チャイルドの*The English and Scottish Popular Ballads*に採録された。批評家Atkinsonは、このバラッドは、オリジナルの出版物が正式の著作権を得るまでの間に、密かに複製されて転売された、いわゆる海賊版の一つであった可能性も指摘する(25-26)。チャイルドはこのうたがブロードサイド・バラッドの一売り手によるうただと認識しながらも、採録した理由を「このうたがドイツ詩人Bürgerの‘Lenore’の改作の流れにある、もっとも美しいヨーロッパのバラッドの英国版と考えられるから」(V: 58)と述べている。タイトルの下に物語の概要が「若者が死後に恋人の元に現れ、40マイルを馬に乗せて連れ去った、以後誰にも目撃されなかったが、墓地で発見された」とあり、その下には‘Tune of My Bleeding Heart & C’という旋律の指定がある。

THE
SUFFOLK, MIRACLE;
BEING

The Relation of a young Man, who after his Death
appeared to his Sweetheart, and carried her behind him Forty Miles
in two Hour's Time, and was never seen after, but in the Grave.

Tune of, My Bleeding Heart & C.

バラッドはもともとうたわれ、ダンスが付随する場合もある、一種の総合芸術であったことは冒頭に述べたが、バラッドやソングをうたうという営みは、16世紀以降のブロードサイド・バラッドへとダイレクトに引き継がれている。ブロードサイド・バラッドは印刷物でありながら新旧の旋律(tune)に合わせてうたわれるものであり、売り手たちは、オートリカスのように、バラッドを売るために通りや市場でうたって売りさばっていた。フリードマンは、旋律という特色がブロードサイド・バラッドに付随した理由を、説教的な、またはプロパガンダ的な韻文を流布させるために、小難しい内容を民衆の嗜好に合わせて広めるための手法であり、それがエスカレートした現象となった、と考察している(45)。確かに、人々の記憶にある古い旋律に粗雑であっても新しい言葉をのせれば粗雑さは軽減され、新しい旋律に古い伝承に由来する歌をのせれば古い歌は新しい歌となって蘇ることになる。このことは、ブロードサイド・バラッドがpopular songsへと発展していく兆候を示している。テキストに隠された音の存在という考え方は、テキストを読むという行為が一般化した時代の読者には難しい。が、例えばNick Groomはバラッドが「その時代時代の生きた音」

であるという捉え方をしており、“the purest english”: Ballads and the English Literary Dialect”において、Percy編纂の*Reliques of Ancient English Poetry* (1765) 中の作品にブリティッシュ・アイデンティティを示す論拠として、豎琴の通底音が聞こえることを指摘している。

(2) 「うたい手と聞き手の分離を示すフレーム」

二つ目の特色は、伝承の時代には分離することのなかった「うたい手と聞き手の分離を示すフレーム」の存在である。ブロードサイド・バラッドには、印刷された物語歌をうたって聞かせるという行為に伴って、定番的な「耳をお貸してください」調の出だしがあり、民衆への啓蒙や宣伝という意識に伴う説教的な結びが見られるのが通常である。これらはうたい手からの一方的な聞き手へのメッセージであり、うたは、伝承バラッドのリフレインに象徴されるような、うたい手と聞き手の共同作業によって創作されるものではなくなったことが端的に示されている。印刷されたブロードサイドの最初期のものと言われ、*Percy Folio*に収録されている“Ladye Bessiye”という1000行におよぶ長編バラッドを、参考に見てみよう。

“LADYE BESSIYE”

[First Part]

God: that is most of might,
And borne was of a maiden ffree,
Save and keepe our comelye Kinge
And all the pore cominaltye! (1-4)

.....

But God that is both bright and sheene,
And borne was of a Mayden ffree,
Save and keepe our comelye King
And the poore cominalyte! (1079-82)

「最大の能力であらせられ、自由な処女からお生まれになった神よ、我らが愛しい王と貧しき民をお救いください」という出だしは結びでも同じスタンザが使われ、宗教的な啓蒙意識が明らかである。

1595年10月15日登録という記録が残るThomas Millingtonなる人物作の“The Babes in the Wood”の出だしも同様である。

“The Babes in the Wood”

Now ponder well, you parents dear,
These words which I shall write;
A doleful story you shall hear,
In time brought forth to light. (1-4)

.....

You that executors be made,
And overseers eke
Of children that be fatherless,
And infants mild and meek;
Take your example by this thing,
And yield to each his right,
Lest God with such like misery
Your wicked minds requite. (153-60)

「世の親御どの よくお聞き／これから書くこの言葉／悲しい物語をお話しします／すべて明らかにいたします」という定番調と、結びの「親のない子／か弱き幼子の／遺言執行人よ／後見人よ／この物語を例として／子らの権利を取り上げぬよう／神が邪悪な心に／このような悲劇で報いることのないように」という説教調は、後に続くブロードサイド・バラッドの定番のフレームとなる。

(3) 「文字テキストの飾り」

三つ目の特色は「文字テキストの飾り」である。廉価な印刷技術の発展とともに粗末な版画挿絵付きの作品が出回り、「サフォークの不思議なできごと」でも見たように、ブロードサイド・バラッドの人気はこのような荒削りな版画や、稚拙なイラストにも支えられ、本文にほとんど何の関係もないものも掲載された。物語に関係のない版画がなぜ人気を支えたのか？これに対してフリードマンは18世紀のCharles Cottonという詩人の作品を援用して、これらは印刷物の飾りとして、「田舎の人は壁画や天井画のようなものとして歓迎した」という説明を試みている(47)。

"Prologue" to Burlesque upon Burlesque: or The Scoffer Scoff'd

Gentiles, behold a Rural Muse,
In home-spun Robes, and clouted Shoes,
Presents you old, but new translated News.

We in the country do not scorn,
Our walls with ballads to adorn
Of Patient Grizell, the Lord of Lorne. (1-6)

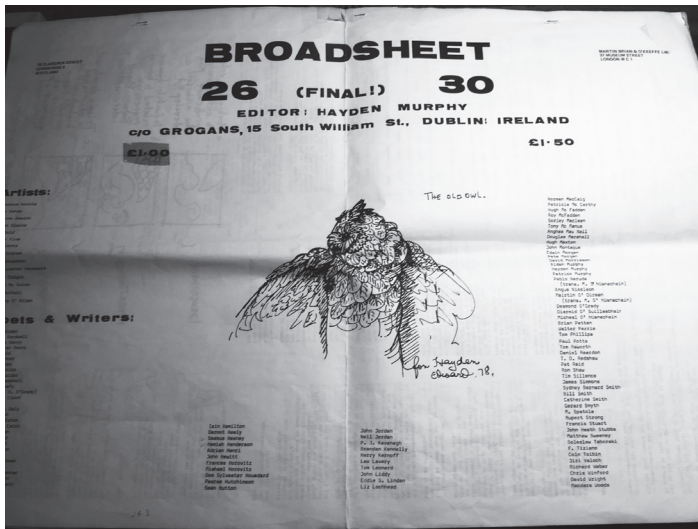
テキストと挿絵は一致しなければならないというのは現代人の合理性であり、飾りは飾りとして楽しむというおおらかな気質は現代人が無くしたもののひとつかもしれない。

シェパードは、18・19世紀に活躍したイギリスの木版画家Thomas Bewick(1753-1828)や諷刺漫挿絵画家George Cruikshank(1792-1878)の作品が当時の社会で果たした役割は、ブロードサイド・バラッドの版画にその原点があると推論する。ブロードサイド・バラッドと版画挿絵の関係は絵と文字の関係性として、バラッド文化研究において今後追求されるべきテーマである。

ブロードサイド・バラッドのうたい手・売り手、ブロードシートの意味、ブロードサイド・バラッドの隆盛の歴史を押さえた上で、これら3つの拡散拡大へつながる特色を重ねてみると、ブロードサイド・バラッドの特色とはこういわざるをえない、という方向に導かれる。それは、フリードマンが使った言葉を援用すれば‘a hopelessly miscellaneous mass of verse’「寄せ集め」(49)、シェパードの言い方では「ブロードサイドという紙と伝承の物語歌はなんでもありの融合」(29)であると。ブロードサイド・バラッドという文化現象は、歴史的には、チャップブック、政治パンフレット、ガーランドと展開した初期印刷メディアによって、種々のトピックを、つまり、人がその時代に置かれた状況を把握し表現したいという衝動を伝えたものである。ブロードサイド・バラッドの核心にあるのは、表現する多様性と表現自体の展開・拡散であると言えるのではないか。

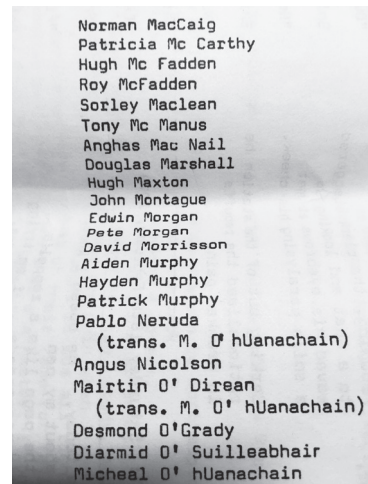
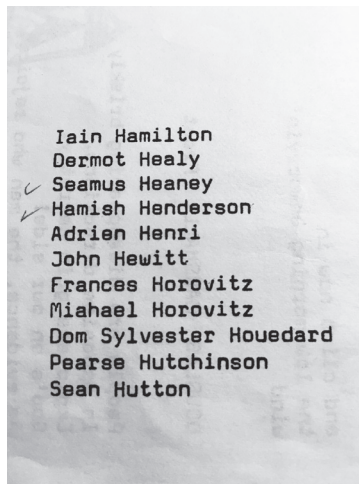
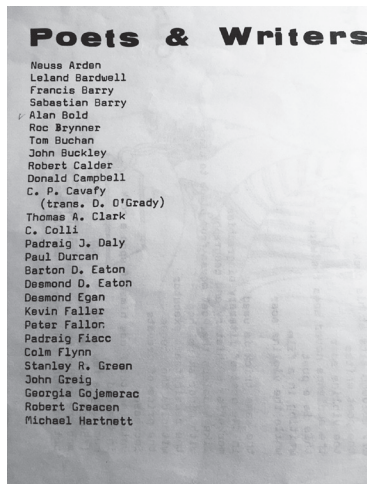
5. 付録 最後のブロードシート

本論の付録として、手元にある「ブロードシート最終号26-30号」の話題を提供する。

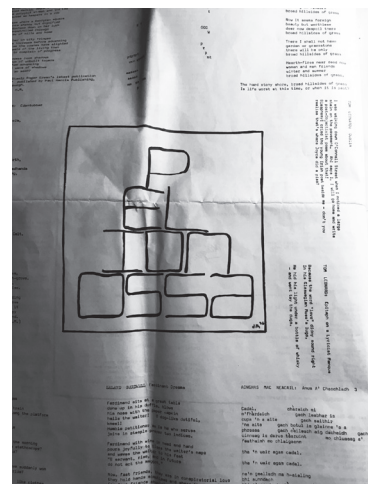
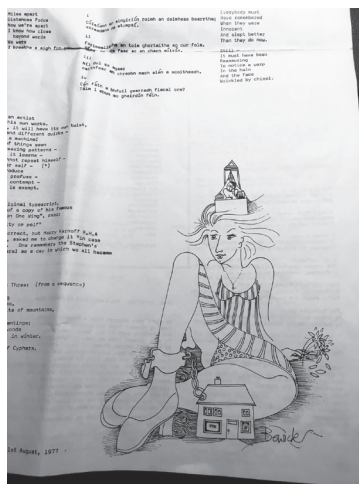
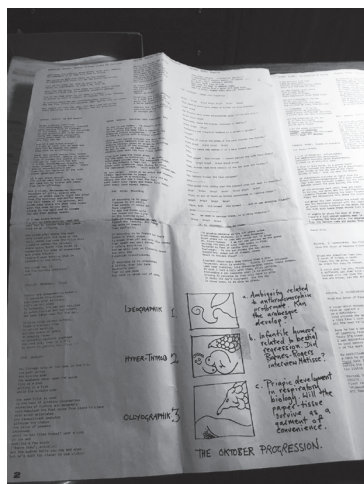


新聞紙大の紙6枚に、両面印刷、1978年ダブリン発行。6枚目両面には、編者 Hayden Murphyによる関係した出版社一覧（イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドの地域別）、協力者献金者への謝辞、これまでのいきさつを綴った編集後記が掲載されており、1枚1号の発行予定だったところを、まとめて5号分を最後に発行という形が取られていると考えられる。なぜ1ポンド、1.5ポンドと2つの値段があるかは不明であるが、地域によって販売価格を調節したのではないかと推測される。寄稿者を見ると、バラッド批評家アラン・ボールド、シーマス・ヒー

ニー、1950年代以降スコットランド文化の保護発展の牽引者ヘミッシュ・ヘンダーソン、20世紀スコットランドを代表する詩人ノーマン・マケイグやエドウィン・モーガンなどの、一流文芸紙かと錯覚しそうな、そうそうたる詩人たちの名前が並んでいる。



しかし、ページをめくると、詩・パターンポエム・散文・イラストの表現芸術が、ごたませで、方向性もバラバラに、かなり粗末な印刷方法で作られており、正真正銘、ブロードサイドの特色が残されている。



前ページ右端の写真は方向もバラバラにバーレクス調の短詩が掲載されている。

Tom Leonard: 'Dublin'

I was walking down O'Connell Street when I noticed a large
stain on the pavement. Ah! says I, I will go home and write
a post-objectivist poem about that!

Blasphemy! cried the young Irish poet beside me – don't you
realize that's where Joyce did a piss?

オコーネル通りの歩道に残る大きなシミ。それを見ると、ポストオブジェクティブの詩を書きたくないと叫んだ語り手に、若き詩人は言う「ジョイスのおしっこだってことだろ」。ブロードサイド・バラッドのスピリットを十分に継承した作品である。

'This is the final issue of Broadsheet'の一文から始まる編集後記には、10年前、アイルランドでの文芸情報誌の不振のために、友人である作家Benedict Ryan と本紙を始め、編集方針の違いから分かれて一人で編集してきたことが綿々つつづられている。信念は“all the result of my belief that Broadsheet should, could and would survive.”「ブロードシートは生き残るべきであるし、生き残れるし、そうなるであろう」。1967年から87年までの全シートはスコットランド国立図書館のBroadsheet Poetry Magazineとして保存されている。

- ¹ 本稿は平成27-30年度科学研究費補助金（基盤研究B）（一般）、課題番号15HG03188「バラッド文化とメディア：18・19世紀のバラッド・ソング・物語詩の出版を中心に」（研究分担者）の助成を得て執筆した。
- ² 伝承バラッドがうたわれていた当時の総合芸術性の再現自体がバラッド研究の課題であったが、近年の電子書籍の出現は、バラッドのテキスト・楽譜・挿絵をそれぞれ紙媒体の2次元空間で再現するという限界を取り払うことを可能にした。山中光義著、陣内敦挿絵『やまなか・みつよしのバラッド・トーク — 魅惑の物語世界 —』（Kindle版、2018年）は、バラッドの詩・翻訳・音楽・挿絵を総合芸術として同一時に体験することを可能にした国内初の電子書籍である。
- ³ 日本英文学会九州支部第71回大会（九州女子大学、2018年10月21日）でのシンポジウム「バラッド文化の継承とその可能性 — 19世紀以降におけるブロードサイド・バラッドとその文化的定義の広がり —」（中島・鎌田・三木・宮原）。本稿は、そのシンポジウムにおいて中島が担当した「ブロードサイド・バラッドとは」の発表原稿を加筆修正したものである。
- ⁴ バラッドと吟遊詩人の論考は *Fowler, A literary History of the Popular Ballad* にさらに詳しく述べられている。
- ⁵ 言及した伝承バラッドの作品名後ろの丸括弧の番号は、F. J. Child 編纂 *The English and Scottish Popular Ballads* 中の作品番号と、アルファベットがある場合は版を示している。

Bibliography

- Atkinson, David and Steve Roud, ed. *Street Ballads in the Nineteenth-Century Britain, Ireland, and North America — The Interface between Print and Oral Traditions*. Routledge, 2016. Print.
- Bryant, Frank Egbert. *History of English Balladry and Other Studies*. Boston: Richard G. Badger, 1913. Web.
- Child, F. J., ed. *The English and Scottish Popular Ballads*. 5 vols. 1965. New York: Dover, 2003. Print.

- Cotton, Charles. *Burlesque upon Burlesque: or The Scoffer Scoff'd*. 1795. Web.
- Fawcett, F. B, ed. *Broadside Ballads of The Restoration Period*. London: John Lane, 1930. Print.
- Fowler, David. *A literary History of the Popular Ballad*. NC: Duke UP, 1986. Web.
- Friedman, A. B. *Ballad Revival: Studies in the Influence of Popular on Sophisticated Poetry*. U of Chicago P., 1961. Print.
- Gerould, G. H. *The Ballad of Tradition*. Oxford, 1932. Print.
- Gllancz, I, ed. *The Percy Folio of Old English Ballads and Romances Vol. IV*. London: De La More, 1910. Print.
- Groom, Nick. “‘The purest english’: Ballads and the English Literary Dialect”. *Eighteenth-Century: Theory and Interpretation*. 47.2-3 (2006) : 179-202. Print.
- Kail, J., ed. *Twenty-Six Political and other Poems*. London: Kegan Paul, Trench, Trübner, 1904. Web.
- Murphy, Hayden, ed. *Broadsheet*. 26-30. 1978. Print.
- Opie, Iona and Peter Opie, ed. *The Oxford Book of Narrative Verse*. 1983. Print.
- Percy, Thomas, ed. *Reliques of Ancient English Poetry, Consisting of Old Heroic Ballads, Songs, and Other Pieces of Our Earlier Poets, Together with Some Few of Later Date*. 3 vols.1765. Ed. Henry B. Wheatley. New York: Dover, 1966. Print.
- Pound, Louise. *Poetic Origins and the Ballad*. New York: Macmillan, 1921. Web.
- Rollins, Heyder E. *Old English Ballads 1553-1625 Chiefly from Manuscripts*. Cambridge, 1920. Web.
- Shakespeare, William. *The Winter's Tale*. Ed. J. H. P. Pafford. Methuen, 1963. Print.
- Shepard, Leslie. *The Broadside Ballad — A Study in Origins and Meaning*. 1962. PA; Legacy, 1978. Print.
- Ward, A. W. and A. R. Waller, ed. *The Cambridge History of English Literature, Vol. III: Renaissance and Reformation*. 1908; rpt. 1980. Print.
- 小田島雄志訳『シェイクスピア全集V』白水社, 1986年. Print.

Broadside Balladry : Diffusion and Expansion of Ballad Culture

Hisayo NAKASHIMA

Kyushu Women's University, Division of General Education

1-1 Jiyugaoka, Yahata-nishi-ku, Kitakyushu City, Fukuoka 807-8585 Japan

Abstract

The previous studies of traditional and literary ballads by the Ballad Study Group to which the author belongs have renewed the definition of balladry: balladry means, not only the categories of oral narrative poems inherited since the Middle Ages and their imitations, but also a culture diffused and expanded by various aspects of balladry. The Group is still continuing discussing at a full-scale how the aspect of printing media of broadside balladry has influenced the ballad diffusion and expansion.

In order to develop the discussion, this paper presents the outline of broadside balladry based on Friedman and Shepard, and suggests the three main characteristics of broadside balladry leading to the diffusion and expansion: (1) broadside balladry is a record of the living sound of the past, (2) it has a style showing the division of singers and audience, and (3) it has some decoration of texts.

As an appendix, 'the last broadsheet' the author has kept is introduced as a sample of broadside spirit in the modern days.

Key Words : balladry, broadside, broadsheet, ballad-singer, printing-media